

小田実全集（小説 第13巻）

円いひっぴい 上



講談社

小田実全集

Makoto Oda



目次

作者まえがき

4

上巻 一から三十三まで

7

作者まえがき

「一寸の虫にも五分の魂」ということばがあります。ならば、「一寸の虫」、あとの「五分」には何がつまっているのでしょうか。投機、金儲けの思惑、打算、処世術、人生体験から来るお説教、そうしたたぐいのもろもろだけであるのか。思想というようなもの、あるいは、観念というもの、そういうものもそこにあつて、なるほど、その「五分」のサイズにおさまっている以上、それは小さい。チンマリとして見える。しかし、それ自体が「一寸の虫にも……」と言っていることはないか。書棚にいかめしく並ぶ「世界大思想全集」のように、あるいは日本の思想愛好家、文学鑑賞家こぞつて嘆賞するドストエフスキーは「カラマーゾフの兄弟」の「大審問官」のくだりのごとく、いかめしく、おどろおどろしく論じ上げているのではない。ただ、それでも、「一寸の虫にも五分の思想、五分の観念」ということもある。チマタの人びと、作者の私自身をふくめて、みんな、けっこうものを考えているのであります。明日の競馬の思惑もやっていけば、世の中のありさま、人類の行く末のこともけっこう考えている。というわけで、「この円いひつぱい」、言ってみれば「思想小説」であります。あるいは、「観念小説」。埴谷雄高さんのそれが闇の天空翔ける馬のものであるなら、これはあくまで「一寸の虫」のもので、地を這っています。

円
い
ひ
つ
び
い
上

酒を飲んでるときやった。このごろはめつきり弱くなってしもうて、昔のように一升酒というわけにいかん。五合も飲めばてきめに眠とうなってしもうて、あげくのはては酔いつぶれ、いや、眠りつぶれや。つまり、どこでもよろしいから、そのまま眠り込んでしまふ。このあいだなんか、気がついてみたら、駅のきわの共同便所のまえに坐つていよつた。このごろの子供みたいに坐つていのか寝そべつていのか判らんようならしない坐り方しているのやあらへん。コンクリートの床の上にアグラかいて坐つて、背筋は支えもなしにまっすぐにしていた。飲んでいるときは駅前通りの「おばはん」で飲んでいたのやし、ほんまにこの店にはおばはんしかいやらんな、おばはんはおばはんでもみんなしよぼくれたやつばつかしやな、と戦争未亡人のおとよはん相手に悪態をついていた。おとよはんはそないに大声で悪態をつきながら、悪態のあいの手みたいに、ここ看板になったらな、いっしょにスシ食べに行こか、駅前のあんな「十円ずし」みたいなケチくさいところがあうで、上六までタクシーで行つて、パリツとしたところで食べる。エビのな、オドリ食わしたる思うてんねん。悪態つきながら、小声でおとよはんの耳たぶのたぶたぶした大きな耳にささやき込み、おとよはんのほうもおとよはんのほうで、うち、オドリなんか食べたことあらへんねん、あれな、生きてるのをそのまま食べるやろ、こわいねん、とええかげんカマトトめいたことを言つてたのやから、あれでどうして、わたしひとりが共同便所のまえに眠りこけていたということになつたのか。一日経つてまた「おばはん」に出かけておとよはんはこわい顔で詰問すると、あのとき、安井はんのほうがりて、「サイナラ」

も言わんと出て行きはったんやないの、とまるで出て行つたのがわるいみたいなことを言う。二人でいっしょに出工へんなんだんか、とカマをかけてみても、いやらしいこと言わんといて工な、うちひとりで帰ったんですが、ととりあわない。ほんとうのことを言うと、わたしは、今でもおとよはんがわたしひとりを共同便所のまえにおき去りにして（それも、スシを食べ、オドリをせいだいにほおばってからや）逃げて行きよつたような気がしてならへんのやけど、わたしがそんな気持をこめておとよはんをにらみつけても、おとよはんはべつに眼をそむけもせんと平気でわたしを見返しとるのや。それで、お勘定のほうはどうやった、「サイナラ」も言わずに出て行きよつたんやろ、ちゃんと払って行きなはったか。わたしが自分のことをそう他人事みたいに言うと、おとよはんも、まるでわたしがそのしょうのない酔いどれのドラ息子の子の父親であるような口のきき方をした。へ工、払って行きはりましたで、それはそれでちゃんと。

なんや気分がわるうなつてしもうて、また、景気づけに「おばはん」で飲んだ。ケツタクソわるい、こんなところでもう飲んでやるもんかと思うたんやけど、関東煮の醤油たきくさいにおいがプンと鼻に来て、おばはん、もう一本つけてんか、というような声を聞いていると、やつぱし、こらえ性がなくなりませんやな。おまけに外は雨ですわ。十一月の夜雨よさめが降って、ほら、歌にもありますな、夜雨よさめの京極河原町、どこで飲むとて、人の世は……まあ、それで、飲んだ。さつきみたいに他人事めいた言い方をしてもよろしい。それで、飲みはりましたで。それはそれで、ちゃんと。

コッブ酒五杯でクダまき始めたこと、ようおぼえています。何でおぼえているかといつと、わしもコッブ酒五杯でクダまき始めるようになったか、弱つなつたもんやな、やつぱし年やな、とはつきり思う

たからです。はじめはおとよはんにむかってクダまいていたんやと思う。そのうち横手に並んで坐っていた、「おばはん」みたいな汚ない店にきちんとネクタイしめて来よつた（あんな店は、夏やつたら、ステテコ姿で行くとこや）銀行員みたいな男にむかってましたんや。顔はさつぱりおぼえてしません。何や知らんけど、ようおぼえてるのはしぶい柄の濃紺のネクタイや。ほんまに、どうしてやる、それだけあざやかにおぼえている。

アケミのことを話してたんとちがうやるか。そんな気がしてしょうないんです。これもようおぼえてますのやけど、ひよいと、先日夜のことが思い出されて来ましてん。つまり、アケミの涙や。アケミが泣いていよつたことですな。このごろへんなくせがついて、わたしは酔つて来るとコップ酒をときどき眼の高さにまで上げて、コップをすかしておとよはんの顔を見たり、「おばはん」のおばはん、つまり、店主、店の持主やな、木下ばあさんの顔見たりして嫌がられますんやけど、そのときもそれを始めていて、安井はん、そんなケツタイなことやめてエな、きしよくがわるいよつて、ほんまにやめとくなはれ、とおとよさんに言われ、木下ばあさんに言われていた。そのうち、そのコップ・レンズで木下ばあさんの娘、御令嬢、「おばはん」の看板娘、スター、キイちゃんの下ぶくれにふくれた顔を見始めたんやと思います。キイちゃんが、いやらし、この人、と大仰に声をあげ、となりの銀行員みたいな男が、あんた、そないにして見たら、何ぞええもん見えますか、とからかうように言い、わたしはわたしで、見えまつせ、ここにいるオカメかて美人に見える、竜宮城みたいなもんですわ。美人もよりどりみどり、宝の山もある、とアホウなことをもつそのときには自分にも酔いが口のあたりにもまでまわつて来たことが判る口調で言つた。そのときですがな、キイちゃんは出戻りの二人の子

持ちで、もう三十近いのやと思いますけど、それでも「おばはん」ではいちばん若いスターや、どつかに若々しいところが残っていて、そいつがコップのガラス、ガラスのなかの液体を通して見るとゆらゆらと浮かび上って見えた。あつ、アケミがそこにいると一瞬思つた。アケミのやつ、ここで、こんな「おばはん」みたいにしてやうのない店で、大人の酔いどれ相手にアルバイトしてこいつめ、とつづけてどなり出そうとしたとたんに、涙がキラキラとキイチちゃんのいちめん小じわの入つたホツペタに流れて、もうそのときには、たしかにキイチちゃんはアケミやつた。

何でアケミが涙流してたんか。わけを言つとアホみたいなことです。わたしかてアケミからわけ聞いたとき笑つてしもつた。前の日の夜、わたしが晩酌のホ口酔い気分でテレビのナイター見てたら、横でさつきから本読んでいたアケミが　まあ、そついつときは、何となく気配で判るもんですな、ひよいと気になつて横を見ると、泣いてますのやがな。涙がほんまにきれいにホツペタに光つて、女の子の涙いうもんはほんとうにいくらでも出るもんですな、眼のふちのところにくらでもたまつて、それからスウツとすじを引いて落ちて行きよる。こつ言つと、えらいのんきに見ていたみたいですけど、正直言つと、何やひどうびつくりしてしもつてたんです。ドキリとしてしもつた。アケミの母親、つまり、わたしの妻のトシ子というのがそんな女で、へいぜいはいつも陽気にケラケラ笑つてばかりいるのに、思いがけんときに涙が眼から出て来て、それが出て来たとなると、ちよつとことですわ。わたしが気配で判るよつになつたといつんも、長年の訓練のあげくかも知れませんが、トシ子の場合、は、まず、鼻が赤くなる。トシ子は、顔の造作はまったくまずいですけど、肌は餅肌のきれいな肌で、それに色が白い。それだけいつそう赤鼻が目立つといつわけですが、もうそないになつて来たときに

は手おくれですな。なだめても、すかしても、こつちが何や知らんけどあやまっても同じで、涙は流れる。涙が流れると、ことが起る。

そやよつて、女子の涙見るとギクリとするようにトシ子と暮しているうちにいつのまにかなつてもうたんですな。アケミのキラキラ光るホッペタを見たとき、あ、始まつたな、ととっさに思った。何が始まつたんか、自分でもさっぱり見当もつかない。それでも、始まつたな、と、ただそれだけは思つたんです。始まつた、ということは、手おくれになつてしもつた、ということでもある。どないしてん、とわたしはアケミに言つたんですが、それは、一瞬間をおいてからやつた。

「どないしてん。」

アケミが黙っているの、わたしはくり返した。ああ、またこの子のダンマリ戦術が始まつたんかいな、と思ひました。だいぶんまえのことになりますけど、一週間近くも黙り込んでいたことがあつた。ことの始まりはつまらんことで、わたしがナイター見よう、アケミは、ナイターなんかつまらんそれよか「歌のグランプリ」を見よう、ということが始まつた。よく新聞なんか書いてあるでしょう、テレビの「チャンネル争い」というやつで、わたしはたいていの場合はずるそうなつてアケミとカオリ（アケミの下の妹や。アケミより五つ下で、今年、六歳になる）の言うなりになつてしまつたのですが、そのときは、わたしは何や意地になつてしもつた。ひとつはわたしがひいきにしている南海が出るということもありましたけど、何ぞ昼間、仕事のこと面白くないことがあつたんとちがいますやるか、アケミが何と言おうと譲れしませんでした。最後にはアケミのホッペタにキラキラ光るもんが出て来よつたというわけやけど、その日はわたしは何が起つたつてええ、山も裂けよ、地も割れよ、という

よつなわれながら健気けなげな心境でいたんでしような、それでも譲れしません。それにアケミの言い分がシヤクにさわった。パパちゃんちゃんは南海のファンやいうけど、お金払ってナイター見に行きはったことがあるか、いつでも座敷に寝そべって半分ウツラウツラしながらテレビを見てはるだけのことやないか、そんなもんファンと言えるか、今からでもタクシー拾うてナンバ球場まで行ってほんまのナイター見に行きはったらええのや、ファン、ファンいうのやつたら、それくらいのサーブスを南海にしてあげなはれ　まあ、あらましそんなことをグジャラグジャラ泣きじゃくりながら言うつつたんですけど、十一歳かそこらの女の子にこんなきついこと言われてみなはれ、ちよつと腹が立ちますで。それに、言い方がよくありませんのや。そんなイチャモンつけよるやり方はトシ子そっくりで、まあ、一口に言うたら、ねちっこいのですわ。こまかなことを次から次へもち出して、白アリがむらがつて大きな木の柱を食いつくすみたいなものです。そこで、わたしがいらいらして来て、おしまいにどなり出す。どなり出したところで、敵はだんまり戦術に移つて、半日でも一日でも、二日でも三日でも四日でも黙り込んでしもうて返事一つしよらんということになる。子供いうもんは親をそっくり真似るものですわ。ほんまにうまいこと真似しよる。結局、負けるのはこつちや。トシ子の場合で言うたら、三日目ぐらいになるとこつちも根負けして来て、いっぺん、「ふぐ助」のテッチリ食いに行かへんかとわたしが何気ないふうにもち出して、それでも黙り込んでるので、もう一言、これはあとで自分ながら余計なことを言つたといつも思つのですが、このあいだのこと、すまんかったな、もう水に流そうやないか、わしもこんなことやつているのは辛いからな、と口をすべらせてしまふ。それでとにかく、よつやく口をきいてもらえし、テッチリもふしようぶしよう食べてもらえしというわけです

けど、アケミもそんなことを横でじいっと見て来とるんですやろな、ダンマリ戦術のあとで負けるのはわたしや。テツチリは高いよつて食べさせませんけど、駅前通りの喫茶店で、アンミツですわ、あれを食べさせたげると言つてしまふのです。と言つたかて、トシ子にむかつてみたいにまさかこつちがあやまるいうわけではありませんで。そんなことはしてはいけませんわ。親が子にあやまるいううなことはしてはいかん。このあいだの新聞見てたら、親でもまちがいをしたら率直に子供にあやまるべきだと書いてありましたけど、そういうことはいかん。そんなことしたら、世の中のしめしがつかんようになります。やつぱし、親は親、子は子や。今日の若い父親や母親はそんなアホウなことをほんまにやっているとのか知れませんが、それで、親を親と思わんような、先生を先生と思わんような子供がでてしまいますのや。あげくのはて、ゲバ棒ふるうて、学校の窓ガラスこわしたり、何の関係もないわたしら市民の家までつぶしにかかつて来よる。第一、先生自身がなつとらんのとちがいますか。アケミの担任の女の先生なんか、ええ年してミニ・スカートはいて、遠くから見たら、まるで、バーかキャバレエの女子おんなみたいや、ということですよ。一事が万事そうで、どだい、先生の性根がくさつとるとちがいますやろか。ミニ・スカート先生でなかつたら、赤旗先生や。赤旗先生でなかつたら、アケミのまえの担任の辻先生みたいに胃病で、ろくすっぽ学校に出て来よらん。そら、人間誰かつて病気になるですよ。そやけど、勤めをズル休みするみたいなことではいけません。わたしなんか見てみなはれ、四十度の熱出したときかて会社に出た。やつぱし、根性の問題やな。病いは気から、というんやありませんか。

その根性がゆがんでしもうとるのですな。アケミの担任のミニ・スカート先生なんか、ええ例ですわ。

そら、子供に作文書かせるのはよろしません。字かて文章かてうまいにこしたことはありません。そやけど、何でもあつたこと書け、何でも思つたこと書け、というのんはまちがいとちがいますやろか。家の恥になるようなことまで書かしたりするのはキツパリやめてもらいたい。父親と母親が夫婦ゲンカをする。そしたら、昨日、パパとママがケンカをしました、と書くアホウな子があるいうんですな。昨日、ママにぶたれました、と書いた子もいます。ママはウソツキや、と書いた子もいる。アケミはまだそこまでは書きませんけど（あれでも、そんな心くばりはしてよるらしいですな）、このあいだ、月賦で電気アンマ器を買つたときなんか、買うか買わなかでまえの晩にもめたことから（うちはそのなもん要りませんで、とトシ子は言い、おまえが要らんかて、わしが必要んや。おまえの肩もまされるのはもうかなわんわ。わしの肩なんか、おまえはもんでくれたことあらへんやないか、とわたしは言つた）、月賦の額までくわしく書いて、まだそこまでやつたらたいしたことでもなかつたが、作文のおしまいのところに、アケミはこないに書きよつた。まだ、わたしはようおぼえていますわ、こんな高いお金出して、おまけに夫婦ゲンカしてまで電気アンマ器なんか買う必要があるか、うちや力オリちゃんなんかは子供で肩これへんのやから不公平とちがうやろか、子供の役にも立たんもんを高いお金を出して買うこともないやろ。読んでたら、何やなさけのうなつて来て涙が出て来てしもつたとトシ子は言うんですけど、今日の子供（おまへ）いうんはほんまにきついこと言いよるもんですな。しかし、まあ、子供は子供でつせ。問題は先生や。この作文にあのミニ・スカート先生は三重丸つけていはつて、これはこれでありがたいことでお礼を言わなければならんことですよやろけど、そのあと、赤インキで、よく書けました、アケミちゃんのくやしいきもちがよく出ています、と評書いてありますのんや。」く

やさしいきもちがよく出ています」とは、これは何ですもん。こんなことぬけぬけ書いて子供をおだてるもんやから、子供はますます親を馬鹿にするようになる。自分たちは労働者やとか何とか言つて赤旗振つてストライキなんかしているうちに、こんなことになつてしまつてゐるんですな。ほんまに世は末世です。末世も末世や。

アケミの涙の話をしているんだしたな。「おばはん」でそいつを思い出したという話や。いや、そのまえにアケミのダンマリ戦術についてケリをつけとかなあきませんな。ものごとにはちゃんどけじめをつけ、ケリをつける。起承転結というもんがかんじんやと、わたしも部下集めていつも言つとるんです。このまえアケミが一週間黙り込みよつたときは、わたしも少しわるかつたと思つてますねん。ナイターほんまに見たかつたらテレビなんか見んとタクシー拾つてナンバの球場まで行つたらええとグジャラグジャラいやみをアケミが言いすぎるもんやから、わたしはとうとう、何言つとるか、このテレビはなわしが金出して買つて来たテレビやぞ、と言わんでもええことを口に出してしまつたんです。それで黙り込みですわ。まるまる一週間、口もきかずや。とうとうこつちが根負けして、このいだからアケミが欲しがつていたシャープ・ペンシルを買つて来てやりました。いつもやつたら駅前の喫茶店のアンミツでことはすみますのやけど、今度はそうはいかん。デパート入つたついでに特売場で買つて来てやつたんですが、それでも二百二十円とられた。えらい出費ですわ。

これで、ようよう、また、アケミの涙の話ですな。さつきも言いましたやろ、テレビでナイター見ている、ひょいと横見たら泣いてました。そのときには「チャンネル争い」も何もなかつた。機嫌よくわたしはテレビ見ている、アケミは本読んでいた。それでひょいと気がつくくと、涙や。キラキラ、ホッ

ベタが光っている。どないしてん。わたしは言いました。二度、くり返して言った。

「かわいそうやねん。」

「かわいそうて、何がかわいそうやねん。」

「象さんや。」

「……………」

「象さんがかわいそうやねん。」

何かと思うたら、アケミは象の絵本見ていたんですが。アケミの絵本やありません。カオリの絵本や。

「これ、見てみいな、かわいそうやで、象さんが……………」

わたしは見ました。「かわいそうな象」、なるほど、象が悲しげにこつちを見てますわ。絵描きいうもんはやつぱしうまいもんで、表紙の絵の象は、べつに涙は流していやらんかったけど、たしかに悲しげに見えた。

戦時中に食糧がなくなつたし、空襲になつたら危険やいうて、動物園のライオンやトラやらを殺しましたな。象かて殺された動物の仲間やつたんやけど、その象の話ですがな。東京の動物園の話やというんです。

はじめは食い物に毒を入れて殺そうと思つたらしい。象は利口な動物ですやろ、毒入つてると思うたら食いよらん。大きな鼻で毒の入ってる食い物だけまき上げて、ポイと捨ててしまひよつた。それで、今度は注射や。何人がかりかで、大きな注射器もつて象の背中によじ登つてる絵が描いてありま

したけど、そっちの方も象先生の皮が厚すぎてうまくいかん。針が折れてしまいよったらしい。あげくのはて、餓死させることにして、食い物をやらんようにしたのやから残酷な話ですわ。食い物はかりやなかった、水もやらんようにしよった。

「あんまりおなかが減ったんで、象さんは芸当しはったんやって。」

「芸当？」

アケミの顔は何やそんなことも知りはらへんのかと言わんばかりの小生意気な顔に急になって、もうそのときは涙はとまっていた。

「動物園で、象さんに芸当させますやる。ようけ客に来てもらおうと思つて。」

「どんなことするねん。」

「パパってしようないなア、ボール転がしたり、台の上に登つてチンチンみたいなことしたり……」

芸当のあとでは、いつも食い物を食わせてもろとったらしい。それで、象も考えよったというわけや。芸当してみせたら、何かもらえるやろうと思つたんやな。

「象使いがかわいそつになつて、食べ物食べさせてあげはったんやて。」

なるほど、痩せおとろえた象が芸当をしている絵があつて、その次は象使いの男たちが泣いている
図や。

「それで、象は毎日芸当しよったんかいな。」

「そんなつまいことに世の中はいきますかいな。」

ませたこと言いよりもする。そないにませた、わけ知ったことを言つときには母親のトシ子そつ

くりの顔になる。

「やっぱし殺さんといかんやろ。それで……」

何かうまいことばを探そうとしたのか判りませんが、ちょっと思案ぶかげに考え込んでいるように見えましたけど、それこそ、そんなふうにつまいことに世の中のことはいかしません。アケミのきどつたかつこうにつぼめたおちょぼ口から出て来たのはまったく平凡なことばやった。

「やっぱし、殺しはつてん。……餓死させはつてん。」

そないに言うたとたんに、またまた、アケミの眼のふちにキラキラ光るものが出て来よつた。また泣き出しよつたらうるさいと思つたもんやから、わたしはあわてて、

「戦争中はな、死んだんは象ばつかしやないんやで。……人間のほうがな、ようけ死んだんや。象どころの話やない。人間かてな、食い物がのうなつて、ようけ死んだ。」

「そやですけどな……」

アケミはわたしをにらみつけてました。まるでその殺された象になつたような眼や。アケミはまさしくその象になつて人間をにらみつけるというわけですやろが、そんなとき、にらみつけられる相手というのんは、象使いというような、ほんまは象に親切にしていた身近の人間なんですやろな。ほかの人間は、にらみつけようと思つたかて、そばにはいませんからな。ほかにしようがないよつて、象は象使いをにらむ。象使いこそ人間の代表やいうて、うらめしげににらむ。つまり、象使いはわたしや。このわたしや。

「人間は死ぬときにかて口がきけますやろ。象さんはものが言えませぬのやで。何にも言わんと死ん

でしまいはったんや。」

それから泣きじゃくりや。死ぬときにものが言えん、何にも言わんと死ぬということがそんなに悲しい、むごいことなのか、わたしにはよう判りませんのやけど、とにかく、アケミは、それまでは声をたてていやらんかったのですが、その自分のことばで決心がついたように派手に泣き始めよった。

その話を「おばはん」でコップ酒五杯目でクダをまき始めたときから、そのまき始めたクダのなかできつとブツブツ言うてたんやと思います。話がえらいこと長いものになってしもつて、あつちこつちとまわりくどいことですけど、わたしがそないな話をしていると、いつもは無愛想でツンケンしているキイちゃんかて、えらいかわいそうな話でんな、とからだを乗り出して来よったように思いますねん。思いますねんとはえらいたよりない話やけど、まあ、もうそのときには酔っぱらつてもてたんやからしょうない。今から考えてみると、コップをすかしてキイちゃんのホツペタがキラキラ光つて見えたんは、ほんとうを言うと、もらい泣きしてたんやからとちがいますやるか。おとよはんが、何やたいそうな、誰ぞ死にはつたお人の話やと思うたら、象さんの話だつか、とバカにしたように言いよつたんも、キイちゃんがもらい泣きしてわたしに親しげにしようたのでヤキモチやきよつたんやと思います。おとよはんという女は、もう五十近い年で誰からもふりむいてもらえへんくせにたまにわたしみたいにチヨツカイかける物好きが現われるとかえつて冷たくあしらうような女で、ほんとうに共同便所のまえにわたしを放り出して行きよつたんやと確信してるんですけど、キイちゃんがこつちに親しくしてそれでヤキモチやきよるんは、見ていてちょっと気味がよろしい。

「象は死ぬとき口きかれへんいうて、なかなかアケミのやつつまいこと言いよるやないか。」

わたしはおとよはんではなくキイちゃんに言つてやつた。そないに自分で言つてみると、アケミがほんとうに頭のよいかわいい子のように思われて来るよつてふしぎや。

「なあ、キイちゃん、そやる。」

「そつでんな。」

キイちゃんはあるまり感動もしていない声で相槌うちよつた。わたしはそれが少し気にさわつたが、キイちゃんはずばやく手を動かしてぶあつい厚揚げをわたしの皿の上においてくれた。厚揚げは関東煮のなかでもわたしの好物のものなんです。キイちゃんはやっぱりわたしの好みをちゃんとおぼえていてくれたんです。わたしはそれだけで何やらうれしうなつて来た。とたんに、おとよはんが横からつっけんどんな口調で、水をかけるといふことばがありますな、水をかけるどころか、まるであたりいちめんにもホースでせいでいに水をまき散らすように、

「人間はな、そら口きけますやる、そやけどな、うちら庶民の言ふことなんか、誰も聞いてくれまへんのやで。死ぬときでも同じや。」

と一息に言いよつた。

（おまはん、何言いたいのや）とわたしは口に出して言つたかどうか、そのところはたしかやないんですけど、そないに心のなかではつきり思うたことは今でもあざやかにおぼえています。それから、「何言いたいのやていつて、判りまへんか、あんさんには」とおとよはんが見得を切るよつにしてえらい見幕で言い返して来よつたよつな気もするし、それともおとよはんまでがキラキラと涙をホツペタに光らせたよつな気もしますねん。気がついてみたら、おとよはんはくどくどと、主人の遺骨と称

するものが返つて来たときのことを話していた。

と言つたかて、何にも面白い話、変つた話やない。そこらに、どこにでもころがつているありふれた話や。途中で聞いているのが面倒くさくなって、もうそんな陰気くさい話やめときいな、わしらはな、ユカイになるために金払つてここで酒飲んでますねんやないか、とわたしは口を出したんですが、ほんとうを言つと、さして陰気な感じになつていたわけでもない。そんな話なんか、實際、聞き飽きてますやろ。それに、もう何年昔の話ですやろか。二十年以上も昔の話やないか。十年ひと昔いいますんやから、ふた昔もまえの話やし、おとよはんみたいな境遇の人はそれこそゴマンといて、もう今では誰でもおばあさんや、ばばあや。今さらごちゃごちゃ言つたところでしょうのなことですやろ。わたしはそんなことをブツブツ口のなかでしゃべつていた。その次「おばはん」に出かけたとき、キイチやんがこないだはようしゃべつてはりましたな、PTAの会長はんの選挙にでも出はつたらどうですかいな、と下手な皮肉を言いよつた。

おとよはんの話というのは、さつきも言いましたやろ、戦死した主人の遺骨の話や。戦争がすんで一年経つて、突然、遺骨が還つて来たから取りに來いと言われて役所に行つてみたら、暗い物置のようつなところに段ボールの箱といっしょにいくつか薄汚れた白い布に包んだ遺骨の箱らしいものが並べてあつた。なにしろ場所がありませんもんで係の若い男は一応は言つてみせたそつですけど、あまりすまながつているふうもない。

「線香一本たててありませんのや。……線香一本たててありませんのや。」

おとよはんはそのころもわめてたんでしょつが、もう一度あらためてというようにわめきたて

よった。「おばはん」なんかで、酒くさい息と関東煮のにおいのなかでわめきたてもしょうのないことやとわたしなんかは思いますのんやけど、そうかと言って、どこでわめきたてたらよろしいのやる。おとよはんは先まわりしてそないにことばを返されたような気がしてわたしは黙って見てましたんですが、おとよはんはもうそのときにはわたしにむかって話しかけていたのではないように見えた。眼がすわって来ていよった。どこか判らん宙空の一点をみつめていよって、わたしが、おとよさん、まあ、落ちつきなはれ、と言ったかてもう聞えるもんやない。

「箱、開けてみましたんやで。あの遺骨の箱な、あんまり腹が立ってしもうたもんやから、開けてみましたんや。……」

おとよはんが急に立ち上ったので、そこでようテレビ・ドラマにあるみたいに店の片隅に行つて泣きじゃくり始めるのかと思つたのですが、そういうわけにはいきません。おとよはんかてこの「おばはん」に泣きに来てるんやない。テレビのタレントはんやったら涙流すだけで万というお金をもらいはるやろうけど、おとよはんはそうはいかん。「おばはん」の持主、店主、つまり、おとよはんの主人の木下のばあさんが、おとよはん、はようこれもつて行つてあげてんか、三番テーブルや、と六十五という年に似ぬかん高い声でわめきたてる。そうなると、お給金はまさにそのためにもろてるもんやから、おとよはんはふらつく足でコップ酒とスルメをかかえて三番テーブル（とたいそうにいうたかて、「おばはん」にはテーブルは三つきりしかない。あとはわたしと銀行員みたいな男が並んで坐つている止まり木があるだけで、そないに説明したら、「おばはん」がどんな店か判りますやろ。つまり、あんさんが会社の帰りに駅前でも一杯やつてはる、そんな店や）へ行きよって、そのあいだ、お

とよはんの話はときれていたわけだが、そんな気もしないのは、よほどおとよはんが大声でわめきたてて行ったからにちがいない。わたしと銀行員みたいな男は顔を見合わせてニヤリとおたがいに笑ったような気がします。それがきっかけで二人は話し出したんですから、きつと、二人はニッコリ笑いあつたんでしょう。人間が三人いて、一人がへんなことを言うたり、したりすると、あとの二人はすぐ味方どおしになれるもんですわ。あの人、ちょっとおかしいでんな、わしら二人は大丈夫でんな、味方になりまひよ、というわけや。

「かしこいお子はんもつてはりますな。」

銀行員は銀行員らしくお世辞を言いよつた。

「何年生でつか。」

「五年生ですねん。生意気で困りますねん。」

わたしはまんざらでもない顔で笑つてました。子供をほめられた顔いうんは、みんな、あないな顔になるんですやるな。わたしは何かお返しせないかん気になつて、

「あんさんとはどうですねん。」

「二人ですねん。女の子二人。」

「そんならうちと同じや。」

それから話は女の子と男の子とどっちが手がかかるか、という話になつて、結論は、女の子のほうが一見手にかからぬように見えるがそんなもんはマヤカシで、ほんまは女の子ほど手にかかるもんはない。そのことは子供ばかりか大人についても真理や、ということ、キイちゃんが、まったく不公

平な結論でんな、ひどいもんや、と子供のように口をとがらせてくちばしを入れると、そこへおとはんが三番テーブルから戻つて来た。それから、だしぬけに、

「骨なんか入つてませんでしたんやで。」

まったく突然に言われたもんで、おとはんが何を言つてるのか判るまでだいぶ時間がかかりましたんやけどそこへいくと、銀行員は頭のええ人ですわ、すぐ、

「何が入つてましたんや。」

と切り返しよつた。

「石ですねん。」

「石？」

「砂利みたいなしよぶない石ですがな。」

たしかにそないに言つてから、おとよはんはハツハツと大声をたてて笑つたように思いますねん。それとも、何やら照れくさげにニヤニヤしよつたのか、とにかく、白い歯が年がいもなく口紅派手につけたぶあつい唇のあいだからのぞいたことだけはたしかや。

「象さんのほつがまだよろしいで。」

「何でや。」

「象さんのお墓いうんがあるんですやろ、さつき、そないに言つてはりましたな。そこへは、やつぱし、ちゃんと象さんの骨埋めてはるんですやろ。砂利を埋めたるのちがいますな。」

「さあ、どやるか。砂利かも知れへんで。もっとも、あんな象みたいな大きな砂利は見つけるだけは

たいへんやな。骨のほうが安上りや。」

わたしは悪い冗談やなど自分でも思いながら言っていた。

「そやけど、とにかく絵本なんか書いてもろてるやありませんか。口きけんでも、象さんには代りにちゃんと口きいてくれはる親切な人が出て来よる。うちの人みたいなことおませんかな。うちの人は人間や。人間やよつて口をききはつた。そやけど、そんなことが何になります。骨もありませんのやで。石しかありませんのやで。それもな、庭石みたいな立派な石やありませんのやで。砂利や、ただの砂利や。」

おとよはんはいつもはこんなにしゃべりようしません。無口のほうで、こつちがムキになって話しかけても、へエ、とか、そうでんな、とかそれぐらいの気の抜けたようなことしか言いよらんのです。が、その夜はちごうてました。おしまいには木下のばあさんもキイちゃんも、ついさつきまで佐渡おけさの合唱をやっていた二番テールの三人連れの客まで呆気にとられたようにおとよはんを見たくらい、ひとりでもくしたてた。それでも最後は、やっぱり年ですな、それにもう何にも言うことがなくなつたんですやろ、息切れがして、咳がたてつづけに出て、肩で大きく呼吸いきをして、それで、まるでラジオのスイッチを切つたときのようにポツンと終つた。

「ご主人は立派に死なれた。」

おとよはんの話が終るなり銀行員がそういかにもおごそかに言い出したのやから、わたしは息がとまるぐらいおどろいた。わたしばかりがたまげたのやない。おとよはんかて、ギクリとしよつた。たしかにギクリとおとよはんの肥つた大きなからだ動きまわしたで。わたしはそのときにはまたコップ

を眼の高さにもっていて、おとよはんをコップを通して見ていたのですが、おとよはんのからだのゆらぎ、心のゆらぎはコップのガラス、あるいは、二級酒「万華」という液体を通してはつきり見えた。「私どもにはよく判っております。」

「……………」

「天皇陛下万歳」と叫んで、倒れられた。そのことは私どもの耳にたしかに伝わっており、気が狂うたんじゃないかとわたしはコップのレンズを通して銀行員を見ました。きちんとネクタイをして、いくぶん上気したように見えたが、洗濯のよくきいたワイシャツの白い襟といい、上品に細くしめ上げたしぶい柄の濃紺のネクタイと言い、どこにも気狂いの要素はない。あまつさえ、わたしがコップのレンズを通して彼を見ているのを知ると、自分もコップを眼の高さにまで上げて、ニッコリした。乾杯のつもりなんでしょうな。わたしもあわててコップを口につけて、コップにまだ半分ほど残っていた二級酒「万華」を喉に流し込んだ。

おとよはんは二人が乾杯しているあいだに、さわらぬ神にたたりなしというようにあたふたと逃げ去っていて、それでもうことはすんだとばかり木下のはあさんもキイチちゃんも二番テーブルの佐渡おけさの三人連れもそれぞれ自分の仕事、つまり、コップ酒と関東煮を売りつけること、あるいは、酒を飲みチクワをつまみ厚揚げを口に入れること、ついでに馬鹿声をはり上げて佐渡おけさを歌うことに専念していたから、あと、わたしと銀行員が何を話していたか、誰も知らないのにちがいない。

と言うても、わたしかてたいしておぼえているというわけではない。たしかにもう酔いが全身にまわって来て、眠とうていしょうがない。そないになって来ると、物音がえらい遠くから潮騒いのように

ひびいて来るようになって、ときどき、銀行員の声だけがやけにはつきりとときれときれに耳に入る。たしか、そのしぐい柄の濃紺のネクタイの男は、人間には死に方があるとくり返して言っているようでした。そりゃ、あたりまえやないか、人間には生き方いうもんがあれば、死に方もある。わたしはそないに言い返してやると、いや、まだまだ、あなたは判つていはらん。センエツながら、私もはそう申し上げるほかはない。人間には、たとえば、泳ぎ方がある。ムチャクチャに水の中で手足を動かしたところでそんなものは犬力キで、前へろくに進みもしなければ、また、長つづきするものでもない。人間は泳ごうとすれば泳ぎ方を学ぶ。人間の生き方についても、教育というようなものは、つまるところ、人間の生き方について学ばせ、準備させることではないか。

「そやのに、人間は一番かんじんの死に方いうことについては放っていますな。安井さん、それは、私どもはまちがっていると見ています。」

どこから聞いてきたのか、銀行員はわたしの名前を知っていて、こつちが相手の名前知らんでいるというのはどうにも不公平のことですけど、今さら、あんさんのお名前は何ちゆうはりますねん、と訊くのもへんですやろ、それで黙っていた。わたしが黙っていると、銀行員は余計調子にのつたようにつづけよつた。

「おとさんの御主人かて、死に方を知つてはつたらよかつたと思えますな。そしたら、あんな死に方せんとすんだ。」

あんまり確信ありげに言うもんやから、あんさんはその死に方とやらを知っているのか、と訊ねてやつた。

「さあ、どうですやるか。」

彼は笑いよった。白い歯がたしかに見えたが、べつに死神のように笑ったというわけではない。

「まあ、勉強して、練習しているところですかな。」

「練習してはるいうて、死に方のか。」

「そうですね。」

何をつづけて言えばよいのか判らんような気持で、わたしは言った。

「死に方にはようけあるんかいな。」

「そら、ありますがな。病死、事故死、自殺、他殺、戦死……病死にかつていろいろありますな。卒中でポックリいきはるのもあるし、胃ガンでこの世ならぬ苦しみをしてからやつとあの世にいきはる場合もある。事故死にも、山で凍え死にする人もいはれば、海でアップアップしはる人もいる。そうかと思うと、ガス中毒、食中毒、ビルから転落死。」

「処置なしやな。」

そうとしか言いようがありませんな、それで、わたしはもう一回、くり返して言った。

「処置なしやな。」

「戦争へ行つてもおとよさんの御主人みたいな砂利になつてしまいはる死に方もあれば、ちゃんとジャングルの山のなかまで出かけて、骨を拾つてもろつて、国葬になる人もいはる。安井さん、山本元帥の国葬、おぼえてはりますか。山本五十六元帥。海軍のえらいさんや。」

「盛大なもんやつたんやるな。わしは日本にいやへんかったから知らんけどな。」

「どこにいはったんです？」

「シナですがな。……あつちこつち連れて行かれたけど、終戦のときは南支ですわ。」

「苦勞しはったんですな。」

銀行員はたしかに「苦勞しはったんですな」と言ったのだが、わたしの耳にはそれがよう生きて帰って来はったんですな」ときこえて仕方がない。それに、そんなふうに言われたところで、ええ、苦勞しましてん、とも、ええ、生きて帰って来ましてん、とも今さらアホらしくて言えたものやない。わたしは代りに、銀行員の顔を正面からみつめながら言うてやった。

「あんさんはどちらにいはったんです？」

答えよらしませんでした。やつぱし、という感じがした。それがどういふことなのか自分にもよう判らんですけど、銀行員がそんなふうに答えよることを予感していたのとちがいますやるか、とにかく、やつぱし、や。やつぱしのやつぱし、や。わたしは別のことを言った。

「死に方練習したら、うまいこと自分の思う通り死ぬますんか。わしは胃ガンで死ぬのはいやや、卒中でポツクリいくほつがええいうて、練習すると、そんなふうになる……んですか。」

「そら、無理ですわ。」

銀行員はまたしくあくあつさりと言った。

「そんなことはできまへんわ。私も、そんなことはできるとは思っていない。それは、神様が決めはることですわ。このごろやったら、お医者はんが決めはることかも知れませんな。心臓をとりかえるなんちゅうこわいことやってはりますやないか。ただですな……」

銀行員はもったいぶった口調でことは切り、(そんなんやったら練習してもしようないやないか、何の役に立ちますねん)とわたしが言いかけると、もうそんな質問ぐらい予期していたというふうな余裕のある姿勢で、

「私どもの考えている死に方ちゅうもんはもつとちがう意味のものですな。」

「……………」

「たとえばすな、安井さん、あなたはこの世の中にワンサとウラミがありますな。死ぬときには、そのウラミを残していかなあかん。どないにうまいこと残していきはるか。」

そのことを言つたとたんに、銀行員の頭が急にのけぞつたように見えて、それこそほんとうに卒中の発作でも起しよつたんではないかと思つてあわてた。何のこともありませんがな。わたしのからだのほつが自然にガタリと段をつけたようにゆれて、もつてたコップのレンズのなかの銀行員の顔がゆれたというわけや。銀行員の顔いうても、メガネをかけてはつたかどうかそれさえはつきりせエへんのやから、実際、どんな顔つきの人やつたか、あとでいくら思い出そうとしてもさつぱり心に浮かび上つて来よらんのですわ。眼鼻だちに一向に記憶がないよつて、顔いうても、要するに顔のリンカクですな。えらい四角いリンカクでしたな。のつぺらぼうの四角や。いや、そないに言つと、まだ四角のなかに何か真白いものでもつまっているようにきこえますな。そんなんやつたらまさしくオバケやが、わたしの言いたいののはちよつとちがう。四角のリンカクだけあるのやな。リンカクの四角だけある言つてもよろしい。中身は何にもあらへん。何にもありません。つまり、吹き抜けや。風がヒュウヒュウ吹き通っているわけや。見ていると、どこからか風が吹いて来て、その四角を通つて、こつ

ちの胸にまで吹きつけて来て、オヤ、と思うと、こっちの胸にも大きな穴が開いていて、みるみるその穴は大きくなって、わたしかて、いつのまにかリンカクや、リンカクだけや。

「死ぬことは避けられせんやろ、人間ですからな。」

銀行員は自信ありげやった。むしろ、ユカイげでさえあつた。わたしはうなずく。うなずくよりしよつがない。

「そしたら、なるべく、ちゃんと、わしはウラミを残して死んで行くんや、ということをはっきりさせなければならんですやろ。」

「そら、そうですな。」

わたしは相槌をうつた。気のない相槌やけど、これかつて相槌でもうつよりしよつないことですよ。銀行員は調子にのつたようにつづけました。

「ウラミをな、顔とかむくろとかに残して死ぬようにせんといかん。」

「つまり、こわい顔して死なないかんいうことですか。むくろのほうも、どない言つたらよろしいか、激しいかっこうして死ぬ。……」

どんなかっこうのむくろがいたい激しいかっこうのむくろなのか、酔いがもう十分以上、十二分以上にまわつて来た頭のなかでわたしはぼんやり考えていた。股をひろげて死んだほうがいいか、それとも閉じたほうがこわいのか、ウラミが残っていることになるのか。

「そんなこと簡単なことやないですか。」

たいそうなこと言わんでもええ、とわたしは思った。

「死ぬときは苦しいし、それに、第一、人間誰しも死にとつもないから、死んで行くウラミは顔に残るわけやろ。むくろにかて残る。」

「残りませんな。」

銀行員はしずまりかえつた声を出しよつた。

「みんな、やさしい顔になりはりますねん。死んだとたんに、どんな人かて、それこそホトケ顔になりはる。むくろかて同じですな。あれは、死ぬとき、それまで一心にこめていた力が脱けるんですな。一説によると、ボソツという音がするそうです。そのとき、ウラミもいつしよに脱け落ちるんとちがいますやるか。……戦争のとき、ようけ死顔やむくろの見はりましたやろ。どんな顔してはりました？ いつそ、やさしい顔してはつたんとちがいますか。人肉食いはつたような人でも、死んでしまえばやさしい顔や。」

わたしのからだは自然にこわばつたんは、戦争のときのことを思い出そうとして心といわずからだといわず全身がそんなふうになつたやろと思ひます。そやけど、そないにしてみても、さて、そのころ見た顔やむくろがどんなやつたか、かいても見当がつかん。これがもう十年も十五年もまえなら、いくらでもはつきり顔もむくろもそのさまが眼に浮かんで来よつたにちがいないと思ひましたんやけど、そないに思つてみてもせんないことや。と言つたかて、かいても忘れてしもつたというんではあれへんのです。それやつたらかえつてよろしいのんやけど（今でも、まだ夢でうなされて、トシ子やアケミをびつくりさせますねん）、眼閉じるとな、顔でもむくろでも、いくらでもつらなつて次々に出て来よる。まるで映画みたいですけど、ただな、顔の中身がありませんのや。むくろの中身があ

りませんのや。リンカクだけや。それだけつらなっていくらでも出て来よって、中身のほうはずんべらぼうで、それでいて、それが死顔である、むくろであるということだけはこわいほど判っている。

銀行員はだし汁で半分茶色にそまつた煮ぬきのタマゴを指でつまんで口にほつり入れると、そのあと指先についただし汁をゆっくりなめてました。まるで猫が舌でなめまわすようないねいななめ方で、いかにもうまそうに見えた。それから、わたしを横眼で下手からうかがいみるようにして見ながら、おもむろに、

「むつかしいですねん。」

「何がむつかしいですねん。」

わたしがそないにオーム返しに訊ねるのを待っていたんですよ、銀行員はカオリの幼稚園の園長先生みたいにひとりでウン、ウンと二度うなずいた。

「死んでから、こわい顔していることですわ。こわいむくろとして残っていることですわ。それはなかなかむつかしいと私も考えるんですわ。」

戦場の死顔やむくろのことがなかなか眼に浮かび上って来ないのがふいに判ったような気がした。あれは、やつぱし、顔にしる、むくろにしる、ちゃんとしたかたちで残つとるのが少なかつたからとちがいますんやろか。まず、顔の左半分が弾丸に吹き飛ばされてあらへん。眼玉がゲリラにくり抜かれている。鼻が野犬にかじりとられとる。からだじゅうウジ虫だらけや。両足があらへん。そうかと思つと、内臓がゴツゴツはみ出して、ほんまに中身のリンカクだけのむくろや。

死顔とむくろのことをなおも考えてましたら、信吾さんの死顔のことが、何年ぶりですやろ、もう

三十年が四十年ぶりになりますな、思い出されて来ましてん。眼に浮かぶというんやないや。もつとからだの奥おくンところ、からだのシンみたいなところに出て来た感じやな。信吾はんいうんはわたしの母方の叔父で、競馬が相場か何やそんなもんになつて借金しこたま背負い込んで自殺してしまひよつたアホな男ですけど、薬のみはつたんやない。ひと思いに首吊つてしまひよつた。なかなかの女たらしで、葬式するときには三、四人、情婦おんながあらわれて立ちまわりを演じよつたということやけど、わたしはまだ子供やったからそんなことまでは知りません。ただな、遺書がありましたん。下手くそな鉛筆書きの遺書で、紙かてどうせ死ぬのやつたらケチせんともうちよつとええ紙に書きなほつたらよかつたのに思うような鼻紙みたいなペナペナの紙にゴチャゴチャ借金のこと書いてあつて、おしまいに、「世ノ中ウランデ死ヌ。ヨロシク」とあつた。子供やったわたしは何で遺書の内容まで知つてゐるのかというと、ことは簡単や、わたしがその遺書を今もって持つてゐるからですわ。信吾はんの遺品を整理して引きとつたんがわたしの母親で、母親が死んだあと、自然にそのガラクター一式がわたしのとこに来たというわけや。今はもう売ってませんけど（倒産してしまひよつたんですか。このころはもつとモダンな薬が出てますよつて無理ないことですよ）、ひところ「女の命」という名前の婦人病の坐薬がありましたな、ガラクターのなかにその坐薬のブリキ鐘があつて（蓋には、うれしい顔の美人の顔が大きく描いてありました）、開いてみましたら、使い古しのヘヤ・ピンやつぶれかかつたカンザシといつしよにゴム紐でくくつた紙束がひとつ出て来た。遺書はその紙束のなかに入つてましたんやけど、ほかの紙きれいうのは、たいていは受取りの紙で、それも金額が拾五銭とか貳拾銭とかいかにもこまい数字のもんばかりで、「世ノ中ウランデ死ヌ。ヨロシク」というような大仰なセリフに

はいかにもそぐわない。

その遺書はまだもってますねん。「女の命」のブリキ罐のなかにヘヤピンやカンザシや領収書なんかといっしょに放り込んでありますねんけど、もう長いこと見たことあらしません。えらい人の由緒ある遺書やあるまいし、もっててもしょうないと思いますのやけど、捨てるわけにもいかしませんや。もっててもべつに邪魔になるものでもないよって放つてあるんですけど、その信吾はん、わたしは死顔まだようおぼえています。よっぼど、子供心に印象が深かったんとちがいますやろか。なにしろ首吊りはったんですやろ。どんなにこわい顔してはるかと思うて見たら、これが案外にやさしい顔してはった。世の中をうらんで死んだ人に見えしまへん。意外な気がしたこと、まだようおぼえています。むくろのほうはどうなっていたか判りませんが、顔のほうにはウラミは残ってませんでした。銀行員の言いよる通りや。

それから銀行員が言うてるのか、わたしがしゃべっているのか、ゴチャゴチャになつて判らんようになつてもうた。シャム双生児というのんがありますな、二人してあないになつてもうた感じで、もうからだもゆらゆらして来て、銀行員がゆれてるのか、安井はん、つまり、わたしがゆれているのか、判っていることは二人して「おぼはん」で酒を飲んでいることで、関東煮を食べていることで、わたしはときどきアツハツハツと笑っていたが、何がおかしいのか、笑いながら自分でもよく判らない。それにいつでもアツハツハツがいつのまにかアツアツと間隔のつまったものになつて、それはまるでいまわのきわの叫び声のようで気に入らない。

いろんなことを話してましたで。まず、死に方を練習すれば、効果があるかどうか、というかんじ

んのことや。死に方を学び、勉強し、練習すれば、ウラムを死顔に残し、むくろに残して死ぬことができるか。わたしはそんなことはできないと言い、銀行員はできると言う。二人で子供みたいに、できない、できる、というやりとりを長いあいだしていたように思う。何ですん、二人とも、子供みたいに。おとよはんが笑った。キイちゃんも笑った。木下のばあさんまでが笑った。どんな練習しますん。わたしのそのもう一つかんじんな問には、銀行員は答えやらへんかった。その代り、毎日、むくろを見てまわったことがあると言いよった。へえ、それやつたら、あんなのお仕事は葬式屋はんだつか。ちがいますん。……にいましてん。その……が何度訊い返してみてもよう聞きとられへん。おしまいには判ったような顔してウン、ウン、とうなずいてしもうた。空襲のときですね。毎日毎日、焼跡歩いてむくろ見て歩きましてん。何でそんな奇特なことしはりましてん、お仕事でつか。わたしがそないに言うつと、銀行員はクツクツと照れたようにおかしな声出して笑いよった。死顔見たかつたからですわ。むくろのころがりぐあい見たかつたからですわ。それで、どんなぐあいでしたんや。どんな顔してはりました、みんな。どんな顔もへちまありませんわ、みんな、まっ黒や。まっ黒焦げや。

「そんならやさしい顔かどうか判れませんかやないか。」

わたしは馬鹿にされたような気になって、そのところはどなっていた。サギやないか。あんなの言うつことは、みんな、サギで、あんなはサギ師、むくろのサギ師や。それほんまやで。

「やつぱし、判りますん。」

銀行員はしずまりかえつた声を出していました。

「やつぱし、やさしい顔して死んでほりますねん。まっ黒焦げになつても、それは判りますねん。むくろかて大人しいかつこうしてはつた。ウラミはもう何にも残つとりませんのやな。みんな消えてしもうた。みんな燃えてしもうたんですな。」

「つまり、あんさんは、そやから死に方を練習せんといかん言いほりますねんな。」

そないに言い出したとたんに、何や知らんけど、ふいにえらいこと腹が立つて来た。銀行員があんまり落ちつきはらつていたのがカンにさわりよつたのかも知れまへんな、大きなお世話や、と言つてやりましてん。あんさんは人間はみんなウラミもつていと勝手に決めてかかつてはるけど、人間はみんな楽しい生きて、それから死ぬんや。ほかの国の人間はいざ知らず、日本人はな、ウラミ、ツラミを顔に残して死ぬような人は誰もおらんねん。あんさんはな、日本人ちゆうもんを誤解してはるんや。わしを見たかてよろしいわ。わしはなア、さつきも言いましたけどな、そら戦争へ行きましたで。えらい苦労しましたわ。そやけどでつせ、わしはウラミなんか、残して死ぬつもりあれへんわ。わしはな、ここだけの話やけど、要領がよろしまんねん。軍隊では、あんさん、まず、要領や。頭のわるい人はあきまへんわ。学校出てたかて、そんなんはあきまへん。軍隊いうところはな、こない言つたら何ですけどな、ほんまに人間が頭がええかわるいかがはつきりするところや。学校出てたつて何やつて、そんなことは問題にならしません。そら、なるほど、わしは学校なんか出てまへん。そやけどな、わしはな、下士官まで行きましたで。伍長まで行つた。わしと同年兵の学校出の黒木なんかまだ一等兵や。……わしはなア、死ぬときは楽しんで死にますわ。ウラミ残して死にませんわ。誰もつらまんと、誰にもつらまれんと……

「むつかしいこと言いはりません。」

銀行員がまた余計なことを言い出しよった。わたしは腹を立てていた。あんさんは、今さっき死人はみんな誰もつらまんと死んでる言いなはったやないか。あんさんの言うこと、やつぱし、みんなサギやな。あんさんはサギ師やな。

「私どもの考えでは、誰にもつらまれんと死ぬのはむつかしいということですね。……」

銀行員はまた、いや、さっきよりも一層落ちつきはらっていよった。

「ま、私どもはそう見とるのですな。」

アツハツハツとわたしは笑うてやった。途中で息がつかまって、アツアツアツとなつてしもうたが気にしない。笑い終つてから、さっき話した「かわいそうな象」の話をまだおぼえてはるか、と語つてやつた。さっきはわざと言わなんだけど、あの話にはもう少し興行きがあつて、あれはな、実は三頭の象の話やねん。あんさん、よう聞いてなはれや、三頭の象の話。一頭の「かわいそうな象」の話やない。

三頭の象はいつときに殺されたんやない、とわたしが言おうとしたら、そうですがな、いつもワルサばかりして象使いに憎まれてた一頭が先に殺されよつたんですがな、と銀行員はニコニコしながら先まわりして言つた。あとの二頭はええ子やつた。芸当もよくやつたし、大人しくもあつた。それでまず手はじめに一頭、うるさい、いやなやつを殺して……わたしがしゃべつていたような気がするし、銀行員が話していたような気もしますな。もうそのころになると、わたしと銀行員はどちらがどちらかよく判らんようになっていて、団子をこねまわしたみたいになっていて、わたしがコップを口にやると彼もやる、わたしがチクワをつまむと彼もつまむ、私が、キイちゃん、もう一杯、彼が、キイちゃ

ん、もう一杯、私が、まず手はじめに一頭、うるさい、いやなやつを殺して、彼が、まず手はじめに一頭、うるさい、いやなやつを殺して……

「うるさいやつにならんかったらよろしいねん。いやなやつにならんことや。」

わたしはまたどなっていた。銀行員はニコニコしてました。何で彼がそんなにニコニコしているのか、あいかわらず眼の高さに上げたコップのレンズごしにわたしは彼を見ていてそんなふうに見えるか、考えはすぐとぎれてまとまらない。あんさん、聞いてなはるか。いやなやつにならんことや。みんなに好かれて、芸当もちゃんとして生きることや。そしたらな……

わたしは絶句した。銀行員を見ると、銀行員はまたニコニコして、一言、サラリと言つてのけた。「殺されんですむ。」

「その通り。おみごと、おみごと。」

わたしはまたアッハッハッと笑った。今度は手まで打った。キイちゃんがわたしをにらみつけたが気にしない。途中でまたアッハッハッはアッアッアッになったが、かまいはしない。苦しい息の下からわたしは言つてやった。

「これがな、あんさん、人生のコツや。」

銀行員はまだニコニコしていて、わたしの顔をわたしがするみたいにコップを眼の高さにまで上げて、コップのレンズを通して見て、しばらくそうしてから、またサラリと口をきいた。

「そうですけどな、安井はん、あとの二頭かて、結局、殺されましたな。」

わたしは訊いてやった。

つづきは製品版でお読みください。